

2003年4月から、文部科学省が200億円の巨費を投じる「個人の遺伝情報に応じた医療の実現化プロジェクト」がスタートしています。そのプロジェクトの柱となるのが30万人遺伝子バンク計画です。

全国8医療機関が協力し、30万人の患者から血液検体と診療情報を集めて中央のセンターに保存しようというのです。いずれ、それらのデータはゲノム創薬や遺伝子診断を手掛ける企業などに提供されることとなります。30万人分の遺伝情報からなる国内初の巨大バンクの構築が、社会に与える影響は多方面にわたり、かつ多大なものがあるはずで、そのインパクトを考えた場合、提供者本人からインフォームド・コンセントを得るだけですべての問題がクリアできるとは、到底思えません。すでに、いくつもの医療機関が検体採取を開始しているといえます。とはいえ、このままで済ますわけにもいかず、まず何が進行しているのか正確に知ること、それから市民の立場で計画の意味や拡がりを考えることを目的に、市民グループ主催によるシンポジウムを開催することにしました。

当初、パネリストとしてプロジェクトリーダーの中村祐輔教授らの参加を予定し、承諾を得ていたのですが、年明けに突如キャンセルの申し出があり、結果的にプロジェクト側との対話は実現しませんでした。中村教授はなぜ来なかったのか、それを知ることによって、このプロジェクトの本質が見えてくるはずで、DNA問題研究会の天笠啓祐さん、優生思想を問うネットワークの利光恵子さん、日本消費者連盟の吉村英二さんらによる講演の後、総合討論を行なう予定です。是非、ご参加下さい。

<http://scicom.blogtribe.org/day-20040212.html>